

連載◆ガラス今昔

「玉碗記」-その後と今

岸井 貫
Toru KISHII
千葉工業大学

月刊「マテリアルインテグレーション」Vol.15, No.8, 9, 10 (2002) 別刷
(株) ティー・アイ・シー

「玉碗記」—その後と今

岸井 貫
Toru KISHII

千葉工業大学

問合せ/キセイ トオル 〒168-0072 東京都杉並区高井戸東3-14-11(自宅) TEL 03-3329-3537 FAX 03-3329-3890
E-mail/toruki@ma2.justnet.ne.jp

キーワード : Grass wares, Nara era, Roman glasses, Sasan glasses, Archeological expedition, Todaiji temple, Archeology, Old tombs

1 東大寺正倉院とガラス玉

奈良東大寺の正倉院に多量のガラス製品が収蔵されている。これらはかつて日本製だと考えられて、奈良時代に日本にガラス工芸技術があったことの証拠とされた：

「硝子玉（註＝びいどろだま。ふりがな＝ふきたま）」奈良の東大寺の宝庫に蔵する所の者数種あり。今尚存す。聖武天皇の御宇盛んに硝子玉を作りしこと以てみるべきなり。是より数百年前の者も亦嘗に存する者あり。多くは古墳より出づ。聖武天皇より数百年前に玉工既に之を製作せしも亦以て見るべきなり。出雲の意字（おう）郡の神戸の玉工（意字郡の玉工は玉作氏なり）能く硝子玉を作る。出雲の国司毎歳これを献ず。是を御富岐玉という。」

「硝子器」奈良の東大寺の宝庫に蔵する所の硝子器数品あり。巻軸、念珠及び刀剣を装うの具、瓔珞、魚符、基石などなり。当時京師の玉工の盛んに硝子器を作りしこと亦以て見るべし。東大寺の古文書の中に琉璃壺あり。当時琉璃を以て壺を造りしことも亦以て見るべし。」（黒川真頼（まより）「工芸志科」。黒川は東大・美大・音大・高師・文部省・帝室博物館などを歴任。国学・博物学・工芸史・美学）¹⁾

「琉璃」はラピス・ラズリなどの貴石を意味するサン

スクリット語の漢字での音訳（「流離」→「琉璃」・「瑠璃」）を起源とし、ガラスに対して流用された古語であり、黒川もここでは「ガラス」の意味で使っていると思う。

正倉院にガラス容器類（瓶・碗・杯・水差し・皿など）数個も所蔵されるのに、黒川がこれらに言及しなかった理由は不明である。日本製でないと判断した為であろうとの編註がある。

また出雲でガラス玉を作った事実はない、との編註もあるが、現在では、島根県玉造町の遺跡群の内に古代のガラス製造遺跡があることが知られている。黒川は令義解（りょうぎのげ）の典鑄司（いものでのつかさ）の條に、出雲の玉造部が「瑠璃」を献ずる、と記し、「瑠璃は火斎（ガラス）の珠を謂う也」と註してあることを典拠にしたかも知れない。

正倉院所蔵のガラス玉は数万箇・数十キログラムに達するが、それらは主に寺院・仏像の「荘嚴具」であり、聖武天皇との直接の関係はないと考えられる。

「工芸志科」は日本の技術・工芸の起源と歴史に重点を置いた書物であり、上記のように、古墳からガラス玉が出ることを引いて、聖武天皇より数百年古く日本の玉工がガラスを作ったと記した。

「東大寺の琉璃壺」が正倉院のガラス容器類を指しているのかわからない。正倉院の容器類のうちに「紺瑠璃の唾壺(だこ)」が蔵される。10世紀頃に中央アジアで中国向けに作られたと推測され、東大寺に治安元年(1021A. D.)に施入されたという記録がある。

2 仁徳陵のガラス碗

黒川は別の著書では出雲の玉工が「硝子碗」を作ったであろう、と記している：

「和泉國大島郡の大山陵(だいせんりょう。「大仙陵」とも。仁徳天皇陵を指す)より出づる所の器物あり。其の形状碗の如し。硝子を以て之を作れり。白色あり紺色あり其の名弁ずるに由なし。其の硝子碗の何の用に供せしを知らず。大山陵は仁徳天皇の陵なり。当時硝子を製する工人ありて器物を造りしこと、以て見るべし(按ずるに此等の硝子器は出雲の意宇(おう)郡の玉工の作りし所の者ならん)。(黒川、「日本瑠璃七宝説」2)

3 聖武天皇と光明皇后

正倉院の御物は、聖武天皇(701-756A. D.)・光明皇后の宮中で愛用され、天皇崩御の四十九日忌に皇后が天皇の後生を弔うために遺愛の品々を東大寺に納めたもの、と考えられた。また御物の工芸品は、唐のものが直接に、または西域のものやそのデザインを受け継いだものが唐を経て、我が国にもたらされたと見られて、現代の人々の関心を、大仏開眼(752A. D. 天平勝宝4年)の盛儀を持った天平の昔と、唐の玄宗(685-762A. D.)・楊貴妃の長安の盛時やシルクロード・西域へと向けさせた。

しかし最近になって、ガラス器に関しては、收藏されていた場所が勅封蔵ではない、納入時の御物のリストにガラス器が挙がっていない、等の根拠で、宮中の用品ではなくて、東大寺の備品であったという見方が強くなってきた(後記)^{3a)}。またガラス工芸史の上で製作地・製作年代の議論が多かったが、最近になって、中国を始め諸外国での考古学的発掘での知見が増し、デザイン・技術の源流地・製作地・製作年代に関して、これまでより詳しく考察ができるようになってきた。

他方で正倉院蔵ガラス器のうちには、論者により製作年代が唐代と清代とに大きく分かれている例もある(緑

瑠璃十二曲長杯^{3b)})。この場合の清代説の根拠は、長杯の製作技術の高さである。

4 正倉院蔵白瑠璃碗

正倉院のガラス器の中に「白瑠璃碗(古くは「白琉璃碗」とも。図1)」がある。

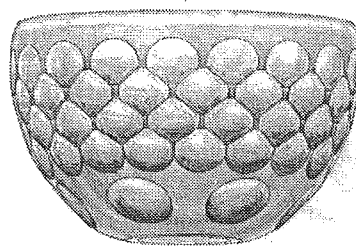


図1 正倉院蔵玉碗のカットの配列を示す概念図

これは淡い褐色を帯びた透明ガラスの肉厚の碗で、外面に円形及び円形が密接したことにより六角形に変形した凹カット模様が規則正しく施されている。

この白瑠璃碗は早くから原田淑人教授(東大考古学)によって「ササン朝ペルシャ」(図2)の製品(「ササン・ガラス」)であると唱えられた⁴⁾。

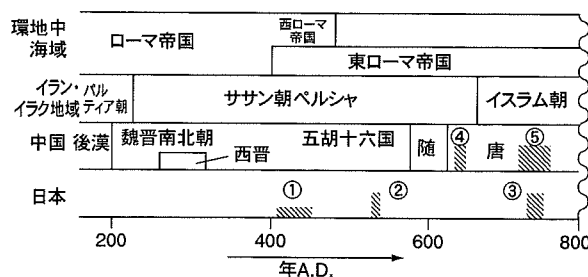


図2 ガラス器に関連した年代図表 ① 仁徳陵・新沢千塚の頃 ② 安閑陵の頃 ③ 聖武帝在位 ④ 唐の太宗在位 ⑤ 唐の玄宗在位

その根拠は、正倉院蔵の美術品にササン朝ペルシャの様式の物が多い、ということであった。この見解があった影響で、日本では西欧にくらべて「ササン朝ペルシャ」への関心が強い、と言われている。

◎連載

5 安閑陵・西琳寺の「玉碗」

江戸時代享保(1720A. D. 前後)の頃、河内の國古市(現・羽曳野市)の安閑天皇陵が大雨で損じた折りに、御陵からガラス碗が見つかった、と伝えられる：

「高屋丘陵はかけまくもかしこくも勾廣國神武金日天皇の御陵なり。… 明徳の役に將軍足利氏の陪臣畠山某此の地に城を築く。… 兵革の後里の民此御陵をあばきしにや… 土中より玉盃一を獲たり。… 終に西琳寺に寄付す。… (太田蜀山人、「一話一言卷三十三河内古市玉碗記」)

碗は里の長の家で保管された後に、近くの西琳寺に納められたが、明治維新の廃仏毀釈の世相のうちに失われた。

西琳寺は蘇我の稻目(蘇我入鹿の曾祖父、570A. D. 没)が建立した「向原寺」を起源とする寺であり、西国三十三番札所の一つである。現在でも「廃仏毀釈」の痛手が残ると感じられるたたずまいである。

6 「玉碗」の出現

明治維新の後八十余年を経て、昭和25年8月に石田茂作氏(仏教考古学者、帝室博物館・東京国立博物館の職歴の後に奈良国立博物館長)が大阪で「飛鳥時代と河内西琳寺」という題で講演をした。その会場で鑑定依頼のために「正倉院蔵白瑠璃碗に似た」という触れ込みでガラス器が持ち込まれた。

「こうした旅先で物を見せられる場合、大ていが悪い物で、さりとてそうも云えず返事に困ることが多いのである。… 正倉院御物に似ているとのふれこみはそんなものがあるはずはなし、内心では「見ずともわるいにきまっている」と思った。… その箱をあけると中から「しふく」包みがとり出された。… 私は「なかなか丁寧にしているなあ、これほどまでに大切にしているものなら、相当なものかもしれぬ」と思った。… 静かにしふくの紐を解いた。目を射たのは正倉院御物に余りにも似た硝子器である。… 西琳寺講演会の当日、その会場で見せる人も見る人もそれとは知らず見せられてこの発見にいたったことは全く不思議。同席した西琳寺住職水谷明観氏が『佛縁だ』と叫び喜んだのも無理はない。…」

この碗は保管状況、付随した文書に見る出土・保管のいきさつ、及び古記録との照合結果から、昔、西琳寺に保管されていたものに間違いないと結論された。

この「玉碗」の写真は直ちに考古学雑誌の口絵で紹介され(図3)、経過は石田氏によって考古学雑誌に報告(上記の文章を含む)されている⁵⁾。

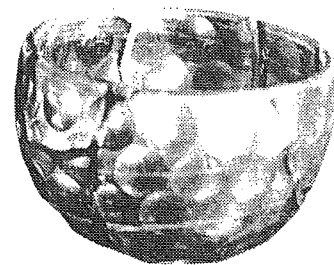


図3 伝安閑陵出土・西琳寺蔵の玉碗。玉碗の再発見を報ずる考古学雑誌36巻3号(昭25)の口絵のコピー

また引用文献の中で、「河内名所図絵」の「玉碗 当山の什宝、亘り(直径)四寸、深さ二寸八分。巡り底一面に星のごとき圓形連なる。玉性分明ならず。これは今より八十年前洪水の時、安閑天皇陵の土砂崩れ散って其中より朱など多く出て、これに交じって出るとなり。其地は田中某といふ農家の持地なり。当寺に蔵む…」の條が示される。「硝子器を玉碗といふはどうかと思ふが、記載の寸法、形状等今度のものと全く一致するは、本器が名所図絵所載の玉碗そのものである事を想像して大過あるまい。」

河内名所図絵にあるというのは、当時はよく知られたガラス碗であったからであろうか。

参考文献には、蜀山人によるもの(前記)と、寛政時代の人、藤(原)貞幹による「集古図卷十一安閑帝御陵白玉器」・「好古日録七十六歴世古物」とが含まれる。

石田氏が「玉碗」の表記を「どうかと思う」と記されたのは、「玉」が中国での翡翠の材質を表す言葉であることを考慮したのであろう。現在の日本では「玉」を貴重な、また美しいものを表現するためだけの美辞として使うので、「玉碗」と呼ぶことについてそれほどの違和感はない。石田氏は「白瑠璃碗」を使っている。河内名所図絵で「玉性分明ならず」と記し、他の引用文献で「玉器・白玉器」などとしているので、江戸時代には材質がガラスだとまでは思いつかなかったのであろうか。

7 酷似する「玉碗」

次いで正倉院蔵と伝・安閑陵出土・西琳寺蔵の二つのガラス碗を並べて比較する機会が設けられた^{5), 6), 7)}。二つは寸法・カットの数・配列がそっくり同じ、僅かにカットの深さの差により凹部が円形又は六角形になる割合に違いがあるだけであった。

二つの碗がほとんど同じ形であったことは学問上の論争を惹き起こした。二つは同一工房で同一時期に、ことによれば同一工人により作られたであろうし、このように珍しいもの(当時、東アジアでの出土例がなかった。現在では後記のように中国での出土例がある。)が二つあれば、日本への伝来も二つ一組・一緒であったろう。これらがそれぞれ違う時期(安閑天皇陵・六世紀前半と正倉院・八世紀中頃(図2)に埋蔵と収蔵されたのは何故か⁵⁾、であり、もう一つはガラス碗が何時、何処で作られたのか、であった。

一つの説は、二つの内、一つは聖武帝崩御に際して東大寺に寄進され、他が安閑陵に追埋蔵されたとし⁸⁾、他の説は西域の工房の製品が二つ同時に安閑天皇陵の時代に伝来し、一つがたまたま伝世して聖武天皇の宮中に入った⁹⁾、と推定するものであった。

このような状況があったためか、考古学雑誌に円形カットを持つガラス器の出土報告の紹介が続いた^{10a)-c)}。玉碗がバルティア朝ペルシャ金貨やローマ帝国の金貨と伴出するから、「ローマン・グラス」である、という考え方が表明された^{10b)}。

原田教授は院蔵白瑠璃碗類品の製作地の候補として、かねて「ササン朝ペルシャと東ローマ帝国とが接触していた地域(図4)」と述べていたが、西琳寺の玉碗に関

連して1、西域で作られた、2、中国でビザンチン帝国(「ビザンツ帝国」・「東ローマ帝国」とも、324A. D. から十五世紀まで)やササン朝ペルシャ(224-651A. D.)のカットガラスを模倣して作った、との二つの可能性を挙げ、中央アジア亀茲國(キジ国、現・クチャ、新疆ウイグル自治区にある県名および県都)出土のものを紹介して、「此処は西方的色彩が至って強く中国文化の浸潤が弱かった」から、ガラス器は(中国製でなくて)西方からの流伝であろう。」とした^{10a)}。

同じ頃に梅原末治教授(京大)も、東ローマ帝国ないしササン朝ペルシャの製品である可能性を述べた¹¹⁾。

玉碗の中国製作説には、古代中国・朝鮮の地域からの類品がないこと、ササン朝説では中心のペルシャでの出土例が知られていないこと、がそれぞれ弱点であった。しかし現在では、中国・イラン・イラク地域で合わせて多数の出土が知られている(後記)。

8 中央アジアの「玉碗」

平井尚志氏はアゼルバイジャン共和国およびモルダヴィア共和国出土のカットガラス片を紹介された^{10b)-10c)}。前者は正倉院蔵品の類品であるが、ローマ貨幣が伴出したから、奈良時代・安閑朝時代よりも相当遡る時代だと推論した。後者は、コップ形の器であるから、院蔵品の類品ではないが、アフガニスタンのベグラム(現・カプールの北方60kmにある大月氏国(クシャン王国)のカピサ城王宮遺跡)で出土した類似品があり、他のベグラム出土品同様に、2世紀始めないし3世紀中頃までの「ローマン・グラス」であろう、と論じた。

「ローマン・グラス」は西ローマ帝国の滅亡(476A. D.)以前にローマ帝国・西ローマ帝国の領域(エジプト・シリア・パレスチナなどの環地中海地域が含まれる)内で生産されたガラス器を指す(図4)。エジプトではアレキサンドリヤから見てナイル川の上流に当たるカラニスにガラス工房があり、此処からの出土品でローマン・グラスの型式編年が決められた。

東ローマ帝国の領域で作られたガラスは「ビザンチンガラス」・「東ローマガラス」などと呼ばれる。

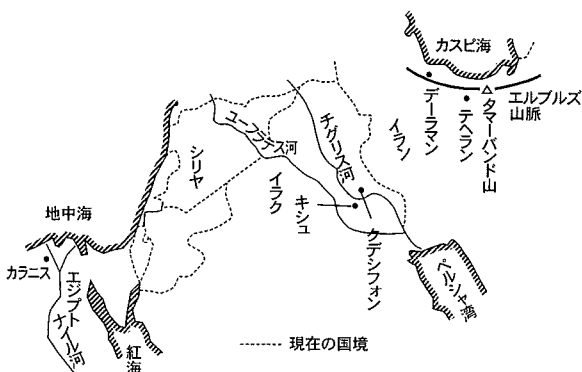


図4 古代ガラス関連地図

9 大量発掘

現在では1933年(昭8)に英米合同調査隊が、キシユ(バグダードの南方約60km. ササン朝の首都的都市の一つ)で工房跡を発見し、この種の厚手円形カット文ガラス器の多数を得たことが知られている¹²⁾。このことが日本に早くに知られていたならば、その後に於ける年代と製作地の議論は混み入らなかったかも知れない。

「大量出土」の報告は、日本では1960A. D. (昭35)出版の成書^{3c)}に引用されているが、当時はその重要性に注目されていなかったようである。

キシユの工房は王権が厳重に製作を管理して、ガラス成形の工程が比較的容易(鑄型への吹き込み又は鑄込み)で、カットの見栄えが良いデザインの製品に絞り、規格化して大量生産と大量販売をしていたことが解っている¹³⁾。ここの出土品は現在「ササン・ガラス」とされるものの種類をほとんど網羅するが、それでも30種を超えない¹⁴⁾。従って、販売された先でよく似た二個の「玉碗」が偶然に組み合わせられて得られる可能性がゼロに近くはなかったであろう。

10 「玉碗記」

井上靖氏の小説「玉碗記」は前に記したような状況のあと、昭和26年に発表された。美術担当の新聞記者である主人公が歴史学者の友人とともに、新発見の玉碗を見、また二つの碗の比較の機会に立ち合う経過を端緒として、「日本書紀」にある安閑天皇と妃との相聞歌と死別、相聞歌について主人公に語った義弟夫婦とその死別の悲しみ、村はずれの木立の中に静かに寄り添い静まる天皇陵と妃の陵、を互いに絡ませて、読者を沈鬱な気分誘い込む。更に友人には、二つの玉碗がペルシャで作られてから一緒にシルクロードの流沙を越えて渡来し、安閑天皇と妃に愛用されてから、一つは天皇の崩御で御陵に副葬され、他は数奇な運命を経ながらも聖武天皇の宮中に入り、永く相別れた後に凶らずも昭和の時代に相逢った、という想像を語らせている。このように小説では硝子器の運命が人々の運命と引き比べて述べられてゆく。

これは井上氏の新聞社の美術記者としての経歴と経験を含めた小説であり、また登場人物の名前も、実在のモデルをある程度まで特定できるように決めている。石田氏の文章と対比すると、玉碗の比較・検討の経過に関し

ては相当史実に忠実に描写されていることが解る。また「玉碗記」という言葉は、蜀山人の「河内古市玉碗記」(前記)から採られたのであろうか。

現在は安閑陵は国道に面しており、静かな環境とは言えない。また天皇陵は天皇・皇妹(日本書紀)、または天皇・皇后・皇妹の合葬陵だという伝えもある。古墳が竪穴式・単一葬用から横穴式・複数追葬可能型式に変わる時期のものとして、古墳の編年の上で注目されたという学史がある。

「玉碗記」に対して、井上靖氏の別の小説「崑崙の玉」の場合には、中国の歴代王朝が「玉(ギョク. 軟玉質翡翠)」を入手するために西域(現・新疆ウイグル地区が産地である)に派遣した使節・探検隊らの苦難の物語を創作によって記した。

伝安閑陵出土の玉碗は完形品に近く継ぎ合わされて東京国立博物館が所蔵しており、常設展示されていた時期があった。

11 円形カット文「ローマン・ガラス」

円形カットはローマン・ガラスの標準的な加飾法であったが、やがて楕円形カットや子持ちカットを混ざるように変わっていった。それと共に円形カットだけのガラス器の製作はローマの周辺地域(中部ヨーロッパ・黒海沿岸・メソポタミア・イランが含まれる)に移っていった。そのため現在でも円形カット文ガラス器の製作地の同定が難しく、確実な同定には工房跡の発見が必要な場合がある。しかしそれでも工人の移動・流入とそれに伴う技術の直接の移転の可能性を考えると、不確かさが残る。

他の例として、厚肉の円形カットガラス器(院藏品はこれに当たる。)はササン朝ペルシャのもの、薄肉の円形カットガラス器はローマ時代、という区別も唱えられているが、これも決定的ではない。一例として「器形や円形カットからササンに間違えられる事が多いが、後期ローマン・ガラスである¹⁵⁾」と評される厚肉の物がある。これは口が大きく外へ反っている点が「玉碗」などササン・ガラスと違う(図5)。

化学分析が許される場合は、製産地がローマ帝国の環地中海域であるか、内陸か、の推定ができる。前者ではエジプト、シリアなどで得られる豊富な天然ソーダを原料に使えるのに対して、後者ではローマ・東ローマとの政治的・軍事的対立があり、また途中での略奪の恐れが

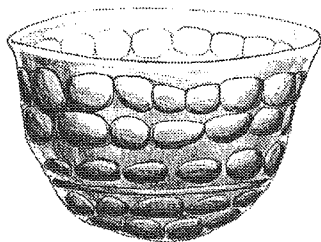


図5 厚肉カット文ローマン・ガラスの概念図

あって内陸への搬送が難しいので、アルカリ源として植物灰を使うために、マグネシヤと酸化カリウムを多く含むからである^{16a),17)}。

植物灰を使って作ったガラス「プラントアッシュガラス」には、ササン朝ペルシャのもの中部ヨーロッパの「ヴァルトガラス(ヴァルト＝森)」と通称されるものが含まれる。ヴァルトガラスはローマン・ガラスの伝統をササン・ガラスよりも直接的に受け継いでいる。しかしササン朝のガラスも初期にはローマン・ガラスの影響を強く受けているといわれ、後記のように産地の推定を難しくしている。

またデザインによる産地の推定と化学分析からの産地推定が異なる場合も時に起きる。そうして古代ガラス器では化学分析が許されない場合が多い。工人の移住や技術移転の可能性がある場合には一つの結論には到らずに、工芸史・技術伝播史の問題として後々まで残る。

12 カット加飾の効果

円紋群をカットしたガラス器は、カットの一つひとつが凹レンズの役目をしており、灯を透かして見ると凹レンズ群を透かして凹レンズ群を見込む形になり、光の編み目模様が現れて大変きらびやかである。これは簡単な加工で意外な効果を出すスマートなデザインで、現在でも時に使われている。夜に酒を満たして灯をすかし見た時、特にきらびやかであったろう。

軟玉翡翠で作られた本来の意味での「玉碗」も、灯をすかし見てまた別の効果を見せることであろう。

玉碗のデザインはガラス素材の成形は楽でも、カットの正確さ、加工の手際よさと熟練が必要である。例えばカットの配列の正しさやカットのエッジの鋭さなど。またカット面を透明になるまで磨き上げることは、全て

人力で加工したのであろうが、莫大な労力を要した筈である。

ササン朝が隊商によって陸路交易をするために、肉が厚くて機械的強度が高いガラス製品が好都合であった。このような交易がササン朝の経済的基盤になったとの見解がある¹³⁾。

13 「ペルシャの市場にて」

昭和34年(1959)に東京大学イラン・イラク調査隊の深井晋司教授がテヘランの骨董店で陶器様の外観を示す碗を見いだされた。これは表面を厚い風化層で覆われて陶磁器のような外見であったが、正倉院蔵の碗とほぼ同型のガラス器であることをみてとられ、興奮を押し隠して購入された：

「…土器などをごそごそいじっていた深井さんに息を殺した声で呼ばれた。…真っ黒なコップ状の器を手に行っている。なんとこれが院蔵白瑠璃碗手カットガラス器の第1号…(伊藤正徳氏、当時テヘラン駐在大使館員)」¹⁸⁾。

此の碗も切子の数と配置は正倉院蔵品と全く同じであった。

14 「アムラシュもの」

後に知られたところでは、昭和34年頃にガラス器を含め形象土器や金属器などの多数の遺物がテヘランの市場に出回り、「アムラシュ(集散地の名)もの」と呼ばれた。ガラス器は正倉院蔵玉碗の類品が推定三百ないし四百個、他型式の円形カット品や円輪貼り付け型加飾ガラス器を含めて約千点、日本に将来されたものでも数十点と推定されている。深井教授も数点を購入することができた。同教授にはこのガラス器に関連して「玉碗記」に触れた文章がある¹⁹⁾。

「アムラシュもの」の出回りは数年で終わり、詳しい学術的調査はできなかったが、それでもそれまで資料の少なかったササン朝ガラスの実態がやや明らかになったと評される。

日本で出土したガラス器又はガラス器破片で、類品が「アムラシュもの」の中に見いだされたものは、「玉碗」の他に、「突起円環文カット碗(福岡県沖の島祭祀遺跡から破片が出土。昭和29-30年調査)。図6a)」と、ア

◎連載

ムラシュもの発見以後（昭和 42 年）に破片が採集された「二重円環文カット碗（京都市上賀茂神社境内）．図 6 b）」とである。

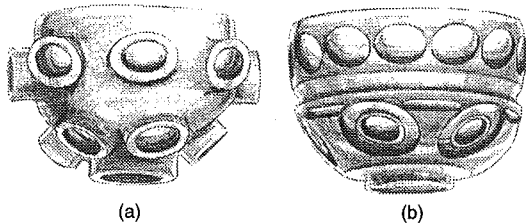


図 6 (a) 厚肉突起円環文ガラス碗の概念図 (b) 厚肉二重円環文ガラス碗の概念図

後者の採集当時、京都で「オリエント 7000 年展」が開催されていて、この破片が展覧されていた二重円環文カット碗の一部であることが判明した。

深井は、後記の新沢千塚 126 号墳出土の薄肉円形カット碗の類品もムラシュものに多いと報告している²⁰⁾。

15 発掘・確認の試み

玉碗類品の出土を学問的発掘で確認すれば、原田教授による玉碗の「西域源流説」を裏付けられると思われたためか、東大調査隊は翌昭和 35 年と昭和 39 年に発掘で出土を確認しようとした^{7), 21)}。

まずムラシュに赴いて、ここが出土品の集散地であることを知り、出土地だと教えられた南方の山間地域（ギラーン州デーラマン地方）に入って熱心に発掘・試行した末に、薄肉榮螺殻状突起装飾文ガラス碗（図 7）を得たが、玉碗類品の出土を確認するという主目的は、ついに果たせなかった。

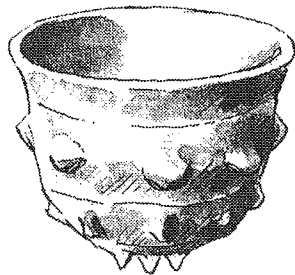


図 7 突起装飾文ガラス碗の概念図

深井は、榮螺殻形突起装飾ガラス碗はシリヤに源を持ち、（シリヤ製の）ローマン・グラスとして普及したが、技法がイラン高原に持ち込まれた、とした。

この見方では、榮螺殻状装飾文ガラス碗を出した墓は 1 ないし 3 世紀のもので、この碗形はローマン・グラスの一つのジャンルであり、他方で玉碗はササン朝の 6 世紀のものであるから、東大隊の玉碗を得ようとする目的が達せられなかったのは「当然であった²²⁾。」と評される。

16 「西方起源説」

深井教授による市場での玉碗類品の発見で、玉碗の西方（中国から見ての中近東地域と環地中海地域）起源説は確認できた、と思える。

深井教授はムラシュものの大量出現から、シリヤ系ガラスとシリヤ系ペルシャガラスがある、と考え²³⁾、由水はここ（カスピ海南岸域）が両者の集散地であつたらう、と記している²⁴⁾。

深井は、玉碗は古代メソポタミヤ地方での石加工品のデザインを受け継いでいると感じ、玉碗の中東地域源流説を持っていたように見える。玉碗の製作地もその近く、すなわちカスピ海南岸ないしアゼルバイジャン南部に想定していたようである。学問的にこれを主張するには、カスピ海南岸地域での学問的発掘で「玉碗」を得ることが絶対に必要と考え、出土地確認に執着したのであろうか。

深井教授が入手した玉碗類品の分析値が発表されており、MgO 4.7%、K₂O 2.3%である²⁵⁾。内陸産、ササンガラスであることの傍証だと思える。

17 榮螺殻型突起装飾文碗

薄肉榮螺殻型突起装飾文ガラス碗について、ローマンガラス説と中東地域説とがある。

此のガラス器はローマ領の環地中海域に属するシリヤ・パレスチナ・カラニス（前記）等数箇所の出土例があり、そのうちのパレスチナの遺跡はガラス工房なので、この碗は「ローマン・グラス」であると判断される。東アジアでは中国北京市西郊の西晋時代華芳墓（304 年葬）からの出土例がある²⁶⁾。

最近では、榮螺殻型碗は「工芸的には「カクタス・ガ

ラス」と呼ばれるローマン・グラス中の特殊な一ジャンルであり、ササン朝の王室工房製とは考えられない²⁷⁾。」と評される(「カクタス」= サポテン)。

これに対して深井教授は、榮螺殻型ガラス器と院蔵玉碗類品の年代を「6世紀までのササン王朝期、ただし年代の上限は不明」と広めに想定し、ともにローマン・グラスの技法がイラン高原のパルティア朝・ササン朝に輸入され、ここで製作が隆盛になった、と記した²⁸⁾。

この種のガラス器が、深井教授が得たと同じ地域で多数得られたことが知られている²⁹⁾。

18 「御物」説への異論

昭和四十年代の中頃に正倉院蔵の白瑠璃碗が聖武天皇の遺愛の品ではないとの見方が発表された³⁰⁾。その根拠は：

聖武天皇崩御に際しての正倉院への納入品リストにはガラス器が全く記載されていない、現存ガラス器の最初の記録が治安元年(1031A. D.)である、建久四年(1193A. D.)と元禄六年(1693A. D.)にそれぞれ大量の新しいガラス器の数上げがあり、「白瑠璃碗」の初出が元禄六年(1693A. D.)である、

などである。建久四年・元禄六年とも大仏修理・大仏殿復興・大仏開眼会の年であることも注意された。

同じ様に、ガラス器が聖武天皇とは関連しないという見解がその後表明された例は

「正倉院に入るまで一体どういう形で伝えられてきたのかも良くわからないが・・もとは東大寺の寺宝であった³¹⁾」・「正倉院の六点のガラス器はどこでつくられたという経路で入ったのか良く判らない宝物である²⁵⁾」

「いずれかの古墳中から江戸時代初期に出てきて正倉院に収められた³²⁾。」

聖武天皇に関連すると説いた例は

「我が国の学者は、両者が一緒に日本に舶載され、一つは安閑陵に副葬、一方は宮中に蔵され、聖武帝崩御後東大寺大仏に寄進、と解している(原田)⁸⁾」

19 ガラス器のセット

実際に現在では玉碗類品、又はこれと榮螺殻状突起紋碗や突起円環文ガラス碗との組み合わせを展示する博物館は、東京国立博物館・岡山市立オリエント博物館・池

袋サンシャインシティ内オリエント博物館・中近東文化センターなど幾つかある。

「幸いにもこの時期のペルシャ美術が我が国の正倉院文物と密接な関連性があったことが理解しやすかったのか、此の十年間にギラーン州出土の作品が我が国の美術館や蒐集家の手に帰したのであった。(深井)³³⁾」

20 玉碗類品の出土

昭和39年(1964A. D.)までに、イランで東大調査隊が熱心に探求したにも拘わらず、院蔵白瑠璃碗類品の出土を確認できなかったが、アムラシュものが出回ったため玉碗の製作地はカスピ海南岸域であろうとの見方が出てきた。しかし昭和55年(1980A. D.)に国土館大学調査隊がキシユのテル＝ハメディヤートで複数個の破片を得た³⁴⁾、イラクではその他にイタリア隊が1975年に、イランではフランス隊が1980年に得た。これらが契機となったのか、1933A. D.(昭和8年)の英米調査隊によるキシユでの発見(前記)が再評価されることとなった。

さらに1988年には類品が中国咸陽で565年葬の墓で得られ、6世紀という年代がほぼ確かになった、と評される³⁵⁾。

21 「瑠璃碗賦」

中国魏晉南北朝の国の一つ西晉(265~316A. D. 洛陽に都する。)の潘尼は美辞を連ねた長文の詩「瑠璃碗賦」を残した：

「流沙の絶儉を濟り(わたり)葱嶺(そうれい)の峻危を越ゆ。凝霜もその潔きに方ぶる(くらぶる)に足らず、澄水も清きに喩ふる能わず。剛き(つよき)ことは金石よりも勁く瓊玉を勵ぐ(しのぐ)。之を磨くも磷らず……³⁶⁾」

この詩は玉碗と関連して引用されることが多いが、年代からは「瑠璃碗」がカット加飾ローマン・グラスである可能性も高いであろう⁸⁾。

しかし、中国中原地域を出てタクラマカン砂漠(流沙)を過ぎると葱嶺(パミール高原)であり、パミール高原を降るとすぐに、多くのローマン・グラスを出土した大月氏国の王宮趾(ベグラム)に到ることを思い合わせると、詩の始めの部分は単なる美辞ではない。パミー

◎連載

ル高原は天山・崑崙・カラコルムの山脈群の間を東西に縫うシルクロードが西へ抜けた部分にあり、中国の西の出入口であった。またベグラムは、地中海域→紅海→アラビヤ海と運ばれ、陸揚げされた商品を集積・中継する位置に当たっていた。

22 玉碗の故郷

日本のイラン地域での調査・研究は、イスラム革命・イラン-イラク戦争により中断していたが、今は再開されている。日本(中近東文化センター・帝京平成大)・イラン共同の調査隊によるカスピ海南岸域での遺跡分布踏査の結果が発表された^{37a)}。

ここを東西に走るエルブルズ山脈は、「アルプス-ヒマラヤ造山帯」の一部であり、中東地域での最高峰タマーバンド(5601メートル)を含む。かつて深井隊が調査した地域は、山脈西部の北面に当たり、そのためカスピ海からの蒸発水分による降水量が多く、標高が高い(約2500m)ために冬には降雪期間が長い、夏期には家畜の放牧地になる。標高数百メートルの地域では棚田での稲作、茶や桑の栽培、養蚕が営まれ、鼠返しを持つ高床・校倉(あぜくら)式倉庫が点在し、米飯が食べられており、日本の農村を連想させる景観を見せている。

また麓の住居には木造・泥塗り壁や藁屋根を持つものが見られるなど、他の中東地域と違い木材が使用できる環境であった。

今は山地の中に自動車道が設けられ、場所によっては交通の便が深井隊の時代にくらべて格段に良くなった。その墓域の墓は、石器時代からバルティア朝、ササン朝を経て、イスラム王朝時代までのものがあつた。東大隊の発掘当時はすでに徹底的な盗掘により、口をあけられた多くの墓があり、人骨などの遺物が累々と撒布されていたという。墓の状態は現在も同じだと報じられた。

此の地域の墓域についての民俗学的調査もされた。墓は集落周辺の平坦面・急斜面に作られる場合と、遥かに標高の高い地域に作られる場合とがある^{37b)}。

他方、イラクでの調査は湾岸戦争で中断したが、現在は再開され、国士舘大がキシユの「王宮様巨大建物遺跡」の発掘を続けている。米国での同時多発テロに際して一時中断したが、近く再再開することが決まっている。

23 正倉院のササン・ガラス

正倉院のガラス器の中、白瑠璃碗と同じくササン朝ペルシャのガラスと想定されたものに紺瑠璃杯(こんるりのつき)がある。円輪形のガラスを大形のワイングラスに似た紺色ガラス製の杯の外面に融着したもので、デザインの特徴から「ササン朝の衰退期」の製品と判断された。アムラシュものの中に類品「円輪貼り付け形加飾ガラス杯」がある。

その他の院蔵ガラス器は、ササン/イスラムの過渡期やイスラム期のものとされている^{38),39)}。福岡市鴻巣館遺跡ではイスラムガラスのコップ破片が出土している。

24 もう一つのササン・ガラス?

前記のように日本で出土した凸起円環文カット碗と二重円環文カット碗の類品がアムラシュ物の中に見いだされたので、これらが玉碗と共にササンガラスであることは確からしい。これに加えてササン・ガラスか? ローマン・ガラスか? として現在でも意見の完全な一致を見ないガラス器がある。

昭和38年に奈良県橿原市新沢(にいざわ)千塚126号墳から薄肉のガラスにカット文を施したガラス碗(図8)が得られた。

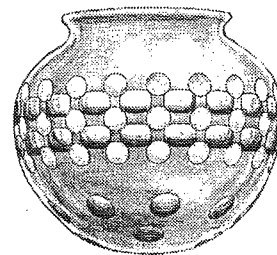


図8 新沢千塚出土薄肉円形カット文ガラス碗の概念図

青色ガラス受け皿と一組になっていた。これは明治初期に仁徳天皇陵からも得られたものの類品ではないか、と考えられている(前記、黒川「日本瑠璃七宝説」の引用²⁾を参照)。

このガラス器について、デザイン・技法からローマン・ガラスとする説がある:

「(仁徳陵のガラスは)千塚の青色ガラス皿や白色切

子ガラス壺などから察して、ベグラム出土のローマン・グラスを連想する(原田⁸⁾。」

「この二点(碗と皿)のローマン・グラスはその製法や器形に典型的なローマン・グラスの特色を備えています(由水⁴⁰⁾。」

最近でもローマン・グラス説が千塚発掘に参加された森浩一教授(元・同志社大)によって記された⁴¹⁾。

他方で類品の化学分析からはマグネシヤが多くて内陸産であり、メソポタミヤ・イランなどササン朝の領域・首都での出土が多いので、ローマ系の技法を取り入れたササン朝の製品、という説がある⁴²⁾。

千塚のガラスでは接合・復元に使えなかった小片が分析され、MgO 4.8%, K₂O 3.1%という結果であった。「ローマン・グラスでドロマイトを使用したものである。」と結論されている⁴³⁾が、ドロマイト使用でなく、ササン朝ガラスの可能性もあろう。同時に「アムラシュもの」の中の類品の分析結果も報告されており、それも同じくらいのMgO含有量であった。

大山陵のガラス器は明治5年に再埋葬されたと伝えられるが、その真偽は明らかでないとも言う。年代的には仁徳陵・新沢128号墳が5世紀中頃又は末、安閑陵が6世紀とされる。

25 「東洋古代ガラス展」

昭和53年に東京国立博物館で正倉院蔵玉碗・伝安閑陵出土品・新沢千塚出土品・薄肉棠螺殻形突起装飾碗とアムラシュものを初めとする多数のガラス工芸品を集めた特別展「東洋古代ガラス」が催された：

「さきの展覧会でわかったことなのだが、現今の日本の蒐集家たち、また公私博物館がこれらの切子装飾碗を積極的に蒐め、イラン発掘品の半分を日本に請来せめているらしいという点も慶賀にたえない(杉山⁴⁴⁾。」

平成4年には横浜美術館でコーニング・ガラス美術館所蔵の二つのササン・ガラスが展覧された。一つは「アムラシュもの」で、かつ日本出土品の類品(突起円環紋カット碗)であった。

26 ガラス器と技術の動き

ササン王朝の工芸はローマ・ビザンチン・パルティアなど各王朝の技術・意匠を取り入れ総合したものと見ら

れるが、ササン朝の工芸(ガラスを含む)・技術・文物も交易により広い範囲に広がった。

ササン朝へのローマン・グラスの伝播は、シリアに発した(430A. D. 頃)キリスト教ネストリウス派の教徒が迫害されてペルシャへ遷り、ついで中国へも広がって「景教」と呼ばれた、という動きに伴ったものとの考えがある。さらにササン朝はシリアも勢力圏に収めていた。

また中国に関しては、イスラム勢力に滅ぼされたササン朝の上流階級の中国への亡命と、ササン朝の事実上の国教であったゾロアスター教(拜火教・祆教とも)への圧迫にともなう工人の流入が、ササン朝工芸の伝播に寄与していた。

例えばササン朝最後の王、イズディゲルド三世は唐の太宗(630A. D. 頃在位)に救援を請い、その子ペルーズは中国に亡命して高宗から「波斯都督」の称号を授けられた⁴⁵⁾。

その後の唐の玄宗は聖武天皇とほぼ同時代であった。

27 円形カット碗の拡がり

深井教授は、院蔵類品玉碗の出土例と彫刻・絵画に表現された例を次のように挙げた：

①正倉院、②伝安閑天皇陵、③中亜クム・トラ(以上、前述)、クテシフォン(ササン朝の首都。現・バグダード近郊)7ないし10個体、キシユ1個、エインズインヌ(北メソポタミヤ、ローマ時代)断片1、ベトラ(ヨルダン南部)断片1、クルガン(アルメニヤ)碗1個、カールマルクス遺跡(中部ウラル。後1ないし3世紀)1個、パルミュラ(シリア)彫刻に表現されている。

以上の中に国土館大の発見は含まれない。著作・出版の時期の問題であったろうか。キシユでの大量出土の情報も含まれない。

また最近までの知見として、クテシフォン(現・バグダード近郊。ササン朝の首都)、アルメニヤ共和国、黒海、バイカル湖地区などでの存在が報じられた^{16b)}。

キシユでの大量出土を報告したD. B. ハーデンが1992年に、日本の研究者・編著者との分担執筆で成書⁴⁶⁾を出版しており、これが日本へキシユ発掘の情報詳しく伝えられる契機であったろう、と筆者は推測する。

由水常雄氏によると、「類似技法で器形のやや異なる」カット・ガラスがエジプト・イタリア・ドイツ・デン

◎連載

マーク・ノルウェーから数百点報告されている⁴⁷⁾。これらは主としてローマン・ガラスやヴァルト・ガラスであるのかも知れない。

28 結び

「玉碗」の年代・産地に関する論議はようやく終結に近づいたのであろうか。少なくとも問題点が明らかになったとは言える。一方、埋葬年代を限れる墓からの出土例が多くなって、年代に関して論点を絞れる状況も増えてきた。ガラス器とそのデザイン・製作技術・技術伝播の特殊性が、古代ガラスの源流の確認を複雑にしていたと感じられる。

以上に述べた各種ガラス碗についての論争の論点を次に簡単に纏める。

厚肉カットガラス碗（正倉院蔵白瑠璃碗類品）

ローマン・ガラス説

バルティア朝ベルシャの金貨や二、三世紀のローマ金貨と伴出する。出土する層位がローマ時代である。円形カットはローマン・ガラスの典型的デザインである。

ササン・ガラス説

アムラシュ物に類品が多い。キシユの工房が発見されている。クテシフォン、スーサ（イラン）でも類品が出土した。類品の分析でマグネシヤが多い。出土地がシルクロードに沿って分布する。

薄肉カットガラス碗（新沢千塚出土品類品）

ローマン・ガラス説

ローマン・ガラスの典型的なデザインである。マグネシヤを含むのはドロマイトを原料に使ったからである。

ササン・ガラス説

このカット文様はローマで使われなくなっただけから3世紀以後のササン・ガラスに引き継がれた。イランでの出土が多い。マグネシヤを多く含む。ローマの技術によるササン朝初期の製品である。分析以外ではローマン・ガラスとの区別が難しい。

薄肉栄螺殻状突起装飾文ガラス碗

ローマン・ガラス説

ローマン・ガラスの典型的なデザインである。シリヤで工房が発見されている。

ササン・ガラス説

ローマン・ガラスの影響を受けて、又は工人を受け入れて、ササン朝初期に作られた。イラン・イラクで出土例が多い。

【参考文献】

- 1) 平凡社の「東洋文庫」の一つとして復刻されている。原著は明治11年に博物館が発行した。
- 2) 文献1)のp.91に引用されている。
- 3) a) 由水常雄「ガラスの道」p.115 徳間書店(昭48)
b) 同p.144 c) 同p.xxvi
- 4) 原田淑人「正倉院ガラス容器の研究」座右宝刊行会(昭23)
- 5) 石田茂作「西琳寺白瑠璃」考古学雑誌36巻4号p.262(昭26)
- 6) 井上暁子「ガラスの話」技報堂出版(昭36)
- 7) 野田裕「幻の瑠璃碗を求めて—秘境デーラマン発掘行」p.59 東京新聞出版局(昭56)
- 8) 原田淑人「考古漫筆」p.149 郁文社(昭45)
- 9) 深井晋司「ペルシアのガラス」p.108 東京新聞出版局(昭58)
- 10) a) 原田淑人「中亞発見のカット・ガラス断片」考雑37巻4号p.238(昭26) b) 平井尚志「南露出土ガラス碗について」考雑40巻4号p.240(昭30) c) 平井尚志「再び南露出土ガラス碗について」考雑41巻2号p.134(昭31)
- 11) 梅原末治「安閑陵出土の玻璃碗について」史迹と美術209号 史迹美術同好会(昭26)
- 12) a) S.Langdon「キシユの発掘」Iraq vol.1 p.124(1934) b) D.B.Harden「キシユの発掘」Iraq vol.1 Part 2(1934)
- 13) 由水常雄「ガラスと文化」p.87 日本放送出版協会(平8)
- 14) 由水 他編 世界ガラス美術全集 第5巻 日本 p.115 求龍堂(1992)
- 15) 由水 他編 世界ガラス美術全集 第4巻 中国 p.229 求龍堂(1992)
- 16) 谷一尚「ガラスの考古学」p.147 同成社(1999)
- 17) 黒川高明「ヴァルトガラス—組成から見たガラスの歴史と文明」p.49 個人出版(2000)
- 18) 伊藤正徳「白瑠璃碗のふる里を求めて」オリエントのガラス p.9 町田市立博物館(1992)
- 19) 文献9) p.151
- 20) 深井晋司・高橋敏「ペルシアのガラス」p.144 淡交社(昭55)
- 21) 文献16) p.50
- 22) 文献20) p.144
- 23) 文献9) p.52

- 24) 文献 14) p.125
- 25) 山崎一雄「遺物は何処で作られたか—化学成分を中心に」
馬淵久夫 他編 「考古学のための10章」 東大出版会
(昭62) p.146
- 26) 文献 16) p.53
- 27) 由水 他編 世界ガラス美術全集 第1巻 古代・中世
p.186 求龍堂 (1992)
- 28) 文献 9) p.80
- 29) 杉山二郎「東洋古代ガラス—東西交渉史の視点から」
p.154 東京国立博物館 (昭55)
- 30) 文献 3a) p.113
- 31) 東野治之「正倉院」 岩波新書 (昭63)
- 32) 文献 14) p.125
- 33) 深井晋司, 高橋 敏 文献 20) p.164
- 34) 川又正智「テル・ハメディヤート」そのⅡラーフィダー
ン 11巻 p.175 (1990), そのⅢ同 12巻 p.245 (1991)
国士舘大イラク文化研究所
- 35) 文献 16) p.50
- 36) 由水常雄 文献 3) p.73 に引用される.
- 37) a) 大津忠彦「イラーン, ギーラーン地方の踏査」平成
12・13年度西アジア発掘調査報告集 p.36, 81
b) 山内和也「民族考古学からみたセフィードロード河西
岸の遺跡」イラン遺跡調査報告会 (2002-3-31)
- 38) 文献 13) p.52, 80, 90
- 39) 由水常雄「ガラスの話」 p.103 新潮社 (昭60)
- 40) 由水常雄「ガラスと文化—その東西交流」 p.132 日本
放送出版協会 (1997)
- 41) 森 浩一「古代史の道 13 ガラスの碗と皿をめぐる」
本の旅人 No.71 p.144 角川書店 (2001)
- 42) 文献 15) p.137
- 43) 小田幸子 分担執筆「新沢千塚 126号古墳」 p.84 橿原
考古学研究所 (昭52)
- 44) 文献 29) p.85
- 45) 文献 8) p.85
- 46) 由水常雄・谷一 尚・A.Saldern・D.B.Harden 分担執
筆, 由水常雄 編 世界ガラス美術全集 第1巻 求龍堂
(1992)
- 47) 文献 3) p.133